〈歴史資料プリント〉
少女３

石川逸子

１

慶尚南道晋州（キョンサンナムドチンジュ）水晶町
私が生まれ育った町

貧しいけれど　母の愛にくるまれ
小正月には　ノルテギ（註１）で遊び

桃の花咲く春にはぶらんこ
夏の日には　柿の木かげで友とたわむれ

でも　その町の　吉野国民学校で
ハングルを習ったのは　一年生のときだけで

あとは三〇枚　紙を渡され
休み時間でも朝鮮語喋ると　紙をとられます

たくさんとられた子はなぐられ　成績も落ちる
私は日本語上手な模範生でした。　ああ　それが
仇になるとも知らず

高等小学校一年生に進んでまもなく
担任の先生の家庭訪問がありました

「勤労女子挺身隊」として日本の工場へ行かないか
金もかせげる　勉強も教えてもらえるぞ

「ハイ」疑うことを知らず　集合場所へ行きました
五十人の少女たち　吉野国民学校からは級長と私だけ

汽車で釜山へ
少女の数はいつか百五十人となり

釜山県庁前の壮行式
知事の激励のあと　壮途の辞を述べたのは親友の
級長で

「大日本帝国のため　天皇陛下のため
私たち　トヤマ　フジコシ工場へ参りますっ」

トヤマ　フジコシ　そこが私の行くところか
日本のどこに在るのか　遠いのか　近いのか

百五十人の少女は　船に乗りました
ぐらりぐらり揺れるなか　全員が母を思い
泣きました

私　カン・ドッキョンの　十五の春
それからの運命を　なに一つ知りませんでした

２

トヤマ　フジコシ
そこでの私の仕事は旋盤

仕事はきつい
一週間交代で夜勤です

なにより辛いのは　空腹
飯ばけつを部屋へ運んで　十二人で分けます

ひとつぶ　ひとつぶ　数えながら食べた
工場へ行く道の草も摘んで食べた

朝食のあと　豆で作ったパンをくれて
喜んで食べたら　昼の分でした

日本のムスメたちは　弁当を食べている
私たち　みなでかたまって泣きました

春がすぎ　夏がきて
働く　寝る　働く　寝るだけの生活

夏がすぎ　秋がきて
金もくれず　勉強もない　おなかが空いてたまらない

「逃げましょうっ」
起床っの合図の前に　友と二人　鉄条網こえて
逃げました

行った先は　新湊（しんみなと）
たった一度の遠足で行ったところ　親切な同胞のおじ
さんのいるところ

「小さな子が可哀想に」
握り飯いっぱい　おじさんは食べさせてくれた
でもすぐ　工場の先生にみつけられた

「模範生が　天皇陛下に不忠でないかあっ」
なぐられました　謝ったけれど　ああ　どうしても
耐えられない

帰りたい帰りたい　心は望郷の思いでいっぱい
帰られる筈もないのに　十五の心はもうほかのことは
考えられない

また逃げました　逃げられる筈もないのに
みなが寝静まった夜　友と二人　どこへ行くあてもな
いのに

私　カン・ドッキョンの　十五の秋
それからの運命を　なに一つ知りませんでした

3

もう新湊のおじさんのところへも行けない
どうしよう　夜の道を心細くうろうろと　二人は走って

故郷は　はるか
鳥でもないのに　小さな舟でさえないのに

そして捕まったのです
軍人の車に　降りてきた軍人に

友はどうしたろう　私一人車に乗せられ
暗い夜道を車は走る　軍人は黙っている　運転手は黙っている

川のあるところへ出ました
ほのかな月明かりに　川が光っている　川の向こうは
黒い山がかぶさる

降りろっ　といわれた
従いてこいっ　といわれた

ああ　冷たい草の上で
軍人は私を押し倒し　私の上にのしかかった

半分欠けたお月さま　ああ　私は何をされたのですか
ただ痛い　むやみに痛い　私に何がおこったのですか

痛む私を乗せて　泣く私を乗せて
車は　また走る　明るんできた頃に　降りろっ
といわれた

民家とてない山のなか
軍人たちのテントがそこここに張ってある　その一つ
のテントに　入れっ　といわれた

テントのなかには　六人の同胞の娘たち
一人　青い顔でだまりこくった子　私と同じに
さらわれた子でしょうか

そこにもまた　あの軍人はやってきた
三つ星の肩章　おれはケンペイの上等兵だ　誇らしげ
にそう言った

ほかの軍人たちもやってきた
五人　六人　とやってきた　同じようにのしかかり
私のからだをただ痛めた

夜　毛布をもって従いて来いっ　といわれました
山に行きました　毛布を敷いて横になれっ　といわれ
ました

軍人たちは大勢　怖ろしくて震えている私に
あとから　あとから　のしかかりました

半分よりもっと欠けたお月さま　私　どうしてこんな
目に会いますか
どうして・・・助けてくれませんか

股から血が滲み　起てっ　といわれてももう動けない
両腕を軍人たちに支えられ　山を下りました

私　カン・ドッキョンの　十五の秋
口惜しく　つらい　十五の秋

4

秋がすぎ　冬がきて
私　十六になりました　冷たいテントのなかで

軍人たちは移動する　何台ものトラックに乗って
最後尾のトラックが私たち　山から山へ

雪がちらつく　トラックの私たちの上に
オンマー！　私　こんなところにいます　朝鮮
ピーと呼ばれて

凍ったような　糸紐ほどの　お月さま
いつまでこんな旅をしますか　教えて下さい

5

春はいつ　冬は長く
こんどトラックが着いたのは　民家が点々と
ある地

遠くには山々が　そこここに田畑が
入れっ　といわれたのは　木の家でした

右側の部屋に　二十人の女たち
出入りする男に　ナンダ　この野郎ッ　悪口を
浴びせている年かさの姉さん

あんたは上等兵に連れてこられたから
お金ももらえず可哀想　そういって小さな私を
可愛がってくれた

腹スイテルダロ　ウマイヨ
春になれば　畑から盗ってきた青菜を　私に食べさせ
てもくれた

チキショウ　ヤツラハ　クニヲトリ　カラダマデトリ
ヤガッテ
アイグ　こんなところまで流れてきたよ

酒のめば　アリラン歌って泣く姉さん
私も　替え歌歌って泣きました

「ああ　山こえて　山こえて　遠く万里を挺身に
上等兵につかまれて　私のからだをちぎられた」

小さい私のからだはもう　性病がひどく
坐っているのも苦しい　いったい　ここはどこだろう

教えて下さい　ここはどこ
夜　私を庭に連れだした上等兵に聞きました

庭には池があり　傍らに松の木が立っている
すぐ近くに民家が見える　いったい　ここはどこです
か

しっ　と上等兵はあたりを見回した
どこかは言えん　天皇陛下が疎開にくるところだ

ああ　天皇陛下のためといって　釜山からトヤマへ
いま　どことも知れない地で　軍人たちにからだを
ちぎられて

雲のあわいからかすかに見える　お月さま
私　いつになったら帰れますか　いつになったら帰れ
ますか

それなのに　ある日　姉さんはいうのです
軍人たちが南から沢山やってくる　あんたを隠せない
からどうしよう

軍人たちはやってきた　荒荒しく獣の息をして
数えきれないほどの彼らが　小さい私を突いていった

顔を上げる暇もない　ただ両足をひろげたまま
あまりの痛さにただ泣くだけ　壊れかけた人形のよう
に

ああ　私　カン・ドッキョンの　十六の春
躑躅（チョンダルレ）（註2）も見ず　林檎（サクラ）（註3）の花も知らず　た
だ木の家のなかで口惜しく両足をひろげて

6

ある日　にわかに外が静かです
軍人たちは　うなだれてラジオを聞いている　私たち
には全くかまわない

それから　軍人の姿は見えなくなり
万歳（マンセイ）っ！　朝鮮語のどよめきが聞こえてきた

ああ　解放されたのだ
だれか　だれか　私をトヤマへ　トヤマへ連れて行っ
てください

この日本で　たった一つ知っている地へ
トヤマの　あの新湊のおじさんのところへ

トヤマに着いたのは　いつだったでしょう
おじさんは驚き　これも運命　帰国するまでここにい
なさい

汽車を乗り継いで大阪へ　大阪からヤミ船で
祖国へ
私の心は　帆のようにうれしさでいっぱい

でも　おじさんに付いてきた日本人のおばさんが
船の中で　私にいった

あんた　妊娠してるよ
もう直きにも　生まれそうだよ

アイグ　天地が裂けるほどの
驚き

どうしたらいい
もう死ぬしかないからだ　です

さようなら　母さん（オンマー）
さようなら　十六の　私の人生

昼も夜も　海に飛びこもうとあたりをうかがった
昼も夜も　日本のおばさんは見張っていた

生きなさい　赤ん坊に罪はない
人はかなしいことこらえて生きるしかないよ

南原（ナムウォン）　菊水旅館
そこで子を産んだ　ただ苦しくのたうちまわり

でも　一声泣いた子の　なんとかわいいこと
まだ子どもの私が　子の母となってオロオロと乳を吸
わせた

帰りなさい　親元へ　上手に話してあげるから
おばさんに付き添われ　帰っていった故郷

なつかしい水晶町　なつかしい柿の木　なつかしい
小さなわが家
でも十六の私は　性病を病み　赤ん坊を抱いて

どうして住んでいけますか　その故郷
思う人と結ばれるまでは　清く蓮の花のように清く
身を保つのが習いの地で

やむなく釜山に出たのです

天主教の孤児院に子を預け　とある食堂で働いた
休みには会いに行く
まわらぬ舌で子は私を呼び　頬かがやかせる
しばらく忙しく　やっと会いに行ってみると
死んだ　といわれました　子の服を別の子が着ていました
それからは　ただガムシャラに働きました
時々　たくさんの血が下りて　倒れたこともありました

7

三十五歳のとき　ソウルへ
やがて 南揚州（ナミャンジュ）郡へ
ビニールハウスで野菜栽培
生きていくためには　ただ日々はたらいて
一九九一年五月八日「母の日」に耕耘機から落ちて腕を折り
肩を痛めて　とうとう働けなくなりました

私の一生なんだったか
上等兵に　日本の軍人たちに　ちぎられた一生

国へ戻ってきてからの　長い年月
一緒に　と声かけてくれた優しい男も幾人かありました
心ときめき　ああ結ばれたいと願っても
汚されたからだを　愛するひとには見せたくない
くっと涙を胸に蔵い
だまって首を振ったのです
ああ　たった十五　たった十五で
折られてしまった　私の人生
ときめく夢がありました
ときめく希望がありました

そして　いま　六三歳
子も孫もいず　さみしく　ひとりぼっち
心臓が悪く
膀胱を病み
私のようなものが
この先　一人でもいいてほしくないから
必要なら声かけてください
どこへでも言って証言します
私　カン・ドッキョンの
ちぎられた人生を
たった十五で
折られてしまった人生を

8

語るその人は美しく　鳳仙花の花にも似て
語るその人の精神は気高く　鳳仙花の花にも似て

・・・・・・・・・・・・

＊石川逸子詩集
『砕かれた花たちへのレクイエム』
花神社　所収

註１　シーソーのこと
註２　躑躅（チンダルレ）　ツツジのこと
註３　林檎（サグワ）　リンゴのこと